

## 神社本庁の現状を憂ひつつ、「神社新報」ならびに読者に訴へる

神奈川・瀬戸神社宮司 佐野和史

この投稿が「神社新報」紙面に掲載されるかどうか、不安を覚えつつ執筆させていた。誌面にてこの文章をご覧いただけたら、賛否を問はず、これに続いて是非積極的に投稿ください、紙面にて論議を重ねさせていただきたい。

まずは「神社本庁」の現状についてであるが、委細をここに書き連ねることは省略させていただきたいが、直近の問題として岩手の神社庁長であり神社本庁理事でもあった藤原君の死亡と、金刀比羅宮の離脱とがある。その前提としての職舎売却にからむ問題と、職員の免職事案、それに続く訴訟の問題もある。

これらの課題を抱へる神社本庁の現況は、もう三十年近く以前のこととはなるが、職員として小生が勤務してゐたころの本庁とはうって変はった、異常な組織になってしまったと感じてゐる。

本庁評議員にも選任させていただいてるし、教学委員（顧問）にも委嘱されてきたので、それらの会議等で質問したり意見発表させていただくことで、すこしでもよりよい本庁の姿が改善されればと思ひながら、それらの役職を勤めさせていたのだが、藤原君の訃報を聞き、もっと効果的な行動が必要であると実感し、筆を執らせていただく。

（あへて「藤原君」といふ表記をさせていただくが、本庁で机をならべあ、BS伊勢大会では半ズボンの制服で汗を流したことを思ひ出している呼びかけであると理解いただきたい。）

繰り返すが、今回は本庁がどう変質し、その問題点はどこかの指摘はあとまはしにさせていただき、この投稿の趣旨が受け入れられ、本紙面にて公論が自由に論ぜられる状況を作っていたら、その中で逐次、問題点を整理しつつ、論じてゆきたいと考へてゐる。

とにかく、現在の本庁の動き方は憂慮に耐へないものがあり、放置すれば崩壊してゆく危険性があるといふ認識を小生はもつてゐる。

さて、一方で、小生のこの居ても立ってもゐられぬ「憂慮」が、全国の神職諸兄がどれほど共有いただけてゐるかとなると、少々不安がある。本庁を信頼しつつ、奉務神社の社務に邁進してゐるといふ多くの善良なる神職諸兄にとって、本庁のあり方云々や施策の詳細などは喫緊の課題ではないかもしれない。

しかし、ここで「神社新報」に対する要望である。今、本庁で何が起つてゐるかもっと記事にして発信してほしい。本庁当局が好ましくないとすることであっても、編集部が、今後の神社界の正しい姿のためには必要だと判断すれば、おもねることなく記事として発信する編集態度を明瞭にされることを要望する。

そもそも、本庁発足もなく、本庁の教化部の中に新聞発行の部署が作られたものを、宮川宗徳、葦津珍彦らはこれを本庁事務局から独立した株式会社として「神社新報社」を発足させた。そこには、単なる本庁のスポークスマンないし御用新聞ではなく、ジャーナリズムとしての正確な情報を全国の神社人に提供すべきであるとの自覚・自覚があつたものと聞いてゐる。

GHQの検閲のなかで、今東京で議論されてゐることを、津々浦々の神社関係者に届けることで、全国の個々の神社が思ひを共有し、戦後の神道指令をぐり抜け、そして今日の神社が存在してゐるといふ歴史は忘れてはなるまい。

しかるに、今東京で起きてゐる諸問題は、「神社新報」には記事がなく、週刊誌やネット情報誌に頼ることとなる状態が久しいのではないだろうか。これで「神社新報」の設立以来の社の目的は果たされてゐるのだろうか。

もちろん人事の機微に関はるものなど記事にできない部分もあらう。しかし、たとへば今回の金刀比羅宮問題に関して言へば、金刀比羅宮の見解と、これに対する本庁当局の見解に相違があるのだから、両論併記でよいからできるだけ詳細な報道をしてほしい。

そこで、読者の皆さんにも要望したい。かうした問題を扱ふ記事が新報紙上に掲載されたならば、その情報に基づき、読者の意見を是非、投稿していただきたい。小生が本庁の現状を憂ひてゐると度々指摘してゐるが、さうした状況を作り出されたのは、特定のグループの考へ方が本庁の執行部の方針となり、神社界の公論が軽視されてきたことにあるとも考へてゐる。

本庁設立の前史として「神社教案」「神社連盟案」があつたことはよく知られてゐる。葦津は「神社教案」を管長が教義を決定する権限をもつとするのは、八百萬の神々をそれぞれ奉斎する神社の伝統には不適切であるとしてこれを強く否定した。しかし、昨今の本庁の執行部の動きにはこれに類するものとなつてゐると小生には見える。

それを許してゐるのは、神社界の輿論（世論）が不明確だからである。戦前の「皇国時報」などには、さまざまな投書が掲載され、それが当時の神社輿論を形成してゐた。

フェイスブックやツイッターも現在では世論をはかるひとつの手段かもしれないが、神社界の内実のある輿論は、新報紙上での議論である。

小生のこの投書が、読者諸兄の賛否いずれにしても投稿を促し、相互に議論して神社界の実のある「輿論」が構成できればありがたく、ここに提案、要望するものである。